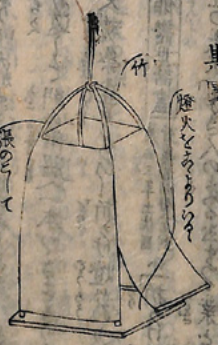
秋の日　袖さしより抄出原本未見

色黒き下紐つまげてかゝとまり　鼠彈

切籠折りけ凄きタぐれ　一井

此折りけ燈籠享保中まで江戸ゆもの〜事ハ父の恩と証とゝべ〜其画ゆて
大略の形を知るのみなりとゝ友人某櫓樹郡古尾提の地蔵堂の数多掛ありしを持
来りて初て見たり彼所ゆハ今も魂祭ゆ用ひそれを仏堂ゆ納り〜るべ〜

其図



竹数を折りたゝその侵垣のもを折りけ
垣とのハ。此燈籠も竹を折りけてはゝ房
鬼ゆの名なり。貴物ゆ中ハ竹を〜〜〜
つなり〜とおり〜くとく竹を切〜〜る
るもあり又名の如く折りけて〜〜〜
のりくきもあり〜〜〜ゆ異なりとゝ

○古尾村ゆ川崎より二里なり崔見の川上り

此半葉の画も後句も

父の恩　小

此草紙享保十五年
刊行人の知りぬ如く
戈牛戯作　三舛著
沉詳の句ハ小南平七と
のかゝきの追善なり

英一蜂画

敷盛乃法蔵の役ゆて世我
去て二十余年　沉詳
おこの画て扇のとりて魂灯籠